

# SETOGIWA TIMES

発行所：行政書士塩見事務所 E-mail: [info@setogiwa.com](mailto:info@setogiwa.com) Web: [www.setogiwa.com](http://www.setogiwa.com)  
大阪市中央区谷町 2-5-4 702号 Tel: 06-6946-9505

## ① うらやましい二人

離婚を考えている人には信じがたいことですが、世の中にはどこまで行っても円満な夫婦というものがあるようです。

あまりにも連れあいに優しい女性がいるので、ある人が感心して「どうして貴方はそれほど優しくできるのですか？」と尋ねてみると「私が優しくするとあの人はもっと私に優しくしてくれるから」との答だったとか・・・

「ごちそう様」としか言いようのない話ですが、夫婦であれ恋人同士であれ、こんなカップルなら円満な関係が続くのも当然かもしれません。

優しさには優しさでこたえてくれる、つまりそれ相応の手ごたえがあるからいいのです。反応の返ってこない相手にそういつまでも優しくできるものではありません。憎しみは果てしなく続きますが、優しさには限りがあります。

## ① 結婚したくない症候群



人を愛することは心が弾む経験であるはずなのに思いもかけない残酷な結果を生むときがあるものです。昨日まで幸福の絶頂にいた人が今日は奈落の底に沈む、世の中は思い通りにならないのだ、と思い知らされます。

それを知っているのか知らないのか「結婚したい相手がみつからない」「結婚したいと思わない」とはじめてから結婚というものに距離をおく若者たちが増えています。

結婚は男女の究極の目標ではありません。結婚しない自由も当然あります。気になるのは、私生活で「結婚を望まない」「結婚は面倒だ」という若者たちの考え方には、仕事の面で責任が重くなるのを嫌って昇進したがる姿とどこかで結びつくものがあるのではないかとことです。

そういう若者たちに「人を愛することを知らずに人生の何たるかを語れるものではない」と言うことはできるし、「他人と付き合うことを面倒がって自分だ

けの世界に生きるのは楽ではあるが、それでは人間というものを半分しか理解できない」と言うこともできます。

でも、それが彼らの心にどれだけ響くことでしょうか。現にその生き方を選択している人たちにとっては「余計なお世話」でしかありません。

## ① この世にただ一人しかない人

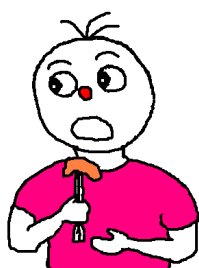
夏目漱石の小説「こころ」には、語り手の「わたくし」に向かって、彼の尊敬する「先生」がある時こんな感想を漏らす場面があります。

「私は世の中で女というものをたった一人しか知らない。妻（さい）以外の女はほとんど女として私に訴えないのです。妻の方でも、私を天下にただ一人しかない男と思ってってくれています。そういう意味からいって、私たちは最も幸福に生まれた人間の一对であるべきはずです。」

語り手のわたくしは「・・・あるべきはずです。」という先生の言いまわしに疑問を持ちます。先生はなぜ最後の一句を、「最も幸福な人間」といい切らないのだろうか。先生のこの言いまわしのわけはのちに明らかになります。

「一生にただ一人しかない人」は、すべての人に平等に割り当てられているはずですが、その人との出会いがもたらすものは人それぞれに違います。

ちょうどいい時に出会えればいいのですが、出会ったときが早すぎて実生活を営む力がなく、泣く泣く別れを告げる人もいるでしょう。思う人がみつからないままに年月が過ぎて、人生も終りにさしかかったころにようやく理想の人に出会ったけれども、「時すでにおそし」ということもあるでしょう。



「一生にただ一人しかない人の存在など私は信じない、いまだかつてそんな人に出会ったこともないしこれからもないだろう、そんなものは幻想に過ぎない」と一刀両断に切って捨てる人もいるかもしれません。

ただこれだけは言えるのではないのでしょうか、「一生にただ一人しかない人」に出会わないよりは出会ったほうがいいと。

ほかにもできます：相続・遺言/交通事故/告訴・被害届/パスポート手続

E-mail: [info@setogiwa.com](mailto:info@setogiwa.com) Web: [www.setogiwa.com](http://www.setogiwa.com)

「私は一生にただ一人しかない人と思える人に何度も出会った」という豪傑が出てきたら・・・、そのときはただ黙ってお話を伺うしかないのですが。